

## 1. ことばの教室の三つの役割

### (1) 相談機関としての役割（教育相談）

＜地域にとって、教室が教育相談の場になっている＞

- ・ことばの教室の教育は、保護者がことばや子育ての心配を訴えて来るところから始まる。
- ・ことばの教室はその名前ゆえ相談に訪れやすく、保護者が最初に相談する場になりやすい。
- ・そのため地域に住む、ことばの心配や様々な子育ての心配をもつ保護者が相談に訪れる。

＜保護者にとって、教育相談が定期指導に通う判断をする場になっている＞

- ・担当者は教育相談で、子どもの状態及び保護者の心配や願いを理解することに努める。
- ・担当者は保護者に対して、子どもの状態や指導の方針について説明する。
- ・保護者は、担当者からの説明を受けて、担当者と話し合う。
- ・保護者は説明や話し合いに納得すれば、定期指導に親子で通う大きな判断をする。
- ・保護者にとって教育相談は、心を整理し、覚悟を決める大事なプロセスとなっている。
- ・近年、教育相談の窓口を開いていない教室も増えている。その場合も指導の開始に当たっては、保護者への説明と話し合いによって、保護者の納得を得るプロセスが重要になる。

### (2) 指導機関（支援機関）としての役割（定期指導）

- ・子どもが、したいことにチャレンジし実現できるよう支援を受けられる場。（自己肯定）
- ・子どもが、主体的に会話をできるように支援を受けられる場。（会話支援）
- ・子どもにとっての問題を改善する支援や指導を受けられる場。（問題の改善）
- ・保護者が子育てについて相談できる場。（子育て支援）

### (3) 他の機関へつなぐ役割（地域との連携）

- ・相談ケースによっては、ことばの教室では対応しきれない場合がある。
- ・その場合、他機関へ紹介する、あるいは他機関と連携して指導する必要がある。
- ・そのため担当者には地域の関係機関と連携できる「ネットワーク」が必要となる。
- ・独自にネットワークを開拓したり、既存のネットワーク（地域のネットワークや道言協）を活用したりしていく。

※本稿において「ことばの教室」とは、主に言語障がいや難聴のある幼児、児童、生徒を対象に指導や支援を行っている機関をさす。

例 ことばの教室 きこえの教室 幼児ことばの教室 子ども発達支援センター等

## 2. ことばの教室の教育目標

ことばの教室の教育目標としては、以下の2点が考えられる。

- 子どもにとっての問題を改善する。
- 子どもが人と主体的に会話できるようになることを目指す。

### (1) 子どもにとっての問題を改善する

- ・「言語症状」だけが「問題」ではない。
- ・「問題」とは「言語症状」と「周りの人の意識」や「本人の意識」を合わせ考えたもの。

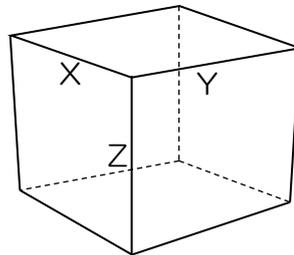
「問題の箱」の考え方

問題の大きさ =  $X \times Y \times Z$  (箱の容積)

問題の改善とは、箱の容積を小さくしていくこと。

X = 言語症状の程度

- 例・力行音がタ行音に置き換わる。
- ・イ列音がひずむ。
  - ・ことばの語頭を繰り返す。
  - ・ことばがつまって出にくい。



Y = Xに対する周りの人の意識

- 例・正しく発音できない。
- ・話が分かりにくい。
  - ・よその人とは話をしない。
  - ・からかわれないか心配。

Z = XやYに対する本人の意識

- 例・周りを気にせず、よくお話する。
- ・話しても、分かってもらえず困っている。
  - ・周りを気にして、言いたいことも話さない。
  - ・周りを気にして、改善したいと思っている。

### (2) 主体的に会話できるようになることを目指す

- ・会話が上手にできるかどうかにかかわらず、自己表現や人関係作りのために、子どもが主体的に人と会話できるようになることを目指していく。

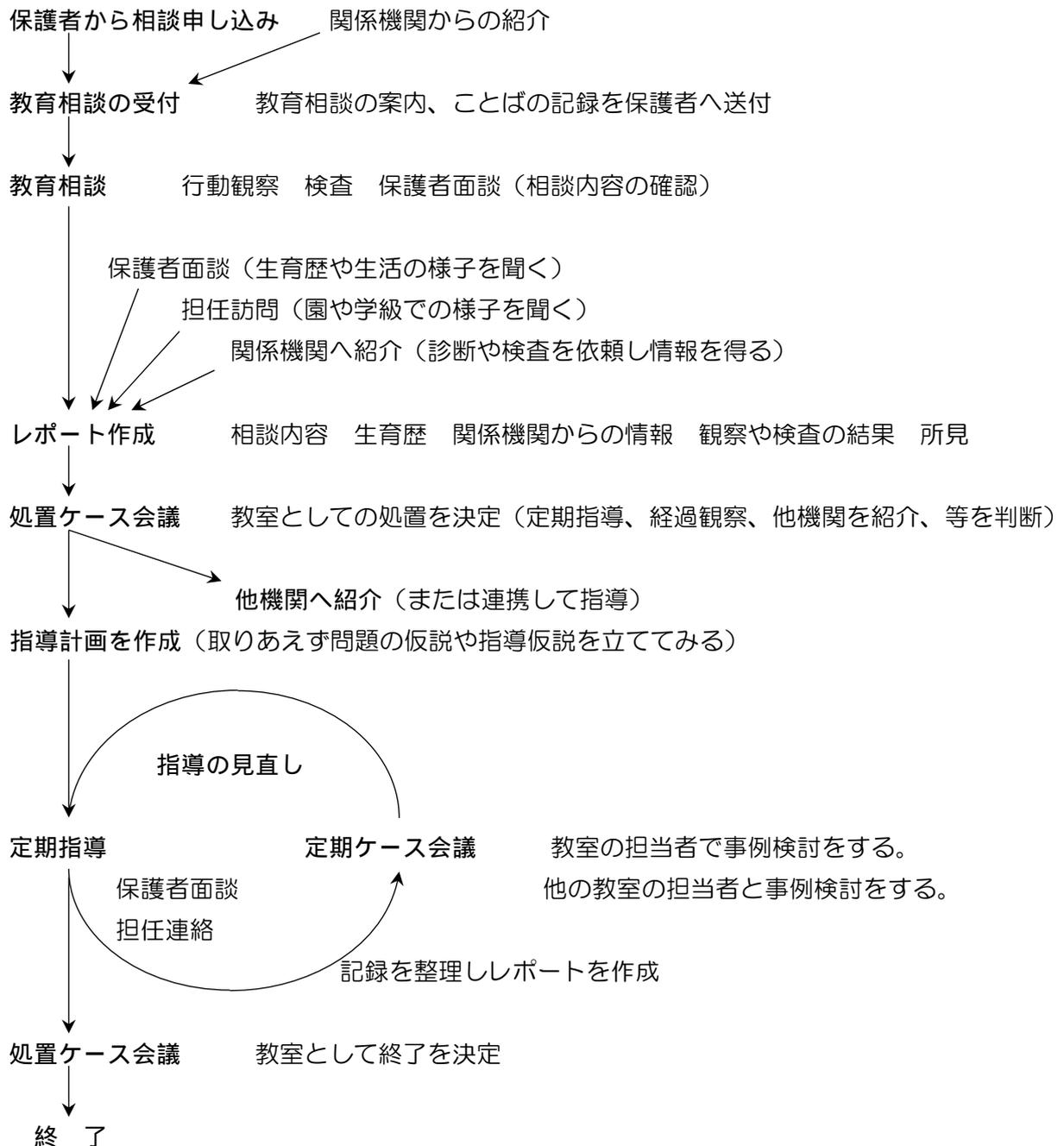
例・人とおしゃべりすることが楽しい。

  - ・自分から人に自発的におしゃべりする。
  - ・人に自分が言いたいことが言える。
- ・主体的に会話ができるようになることは、言語症状を改善するためにも効果的である。
- ・言語症状が改善されても、主体的に会話ができない場合には、指導を継続する場合がある。
- ・言語症状の改善が見込めない場合、主体的に会話ができることを目標に指導をする場合がある。

教育目標とは別に、現在から将来に向けての願いとして

- ・子どもには、現在も将来も、人々の中で孤立せず人とつながり続けてほしい。
- ・主体的に人と会話ができれば、人とつながりやすくなり、孤立しにくくなる。
- ・そうなるためにも、良い会話体験をたくさん体験して、人と会話することを諦めない、人とつながることを諦めない人に育ててほしい。

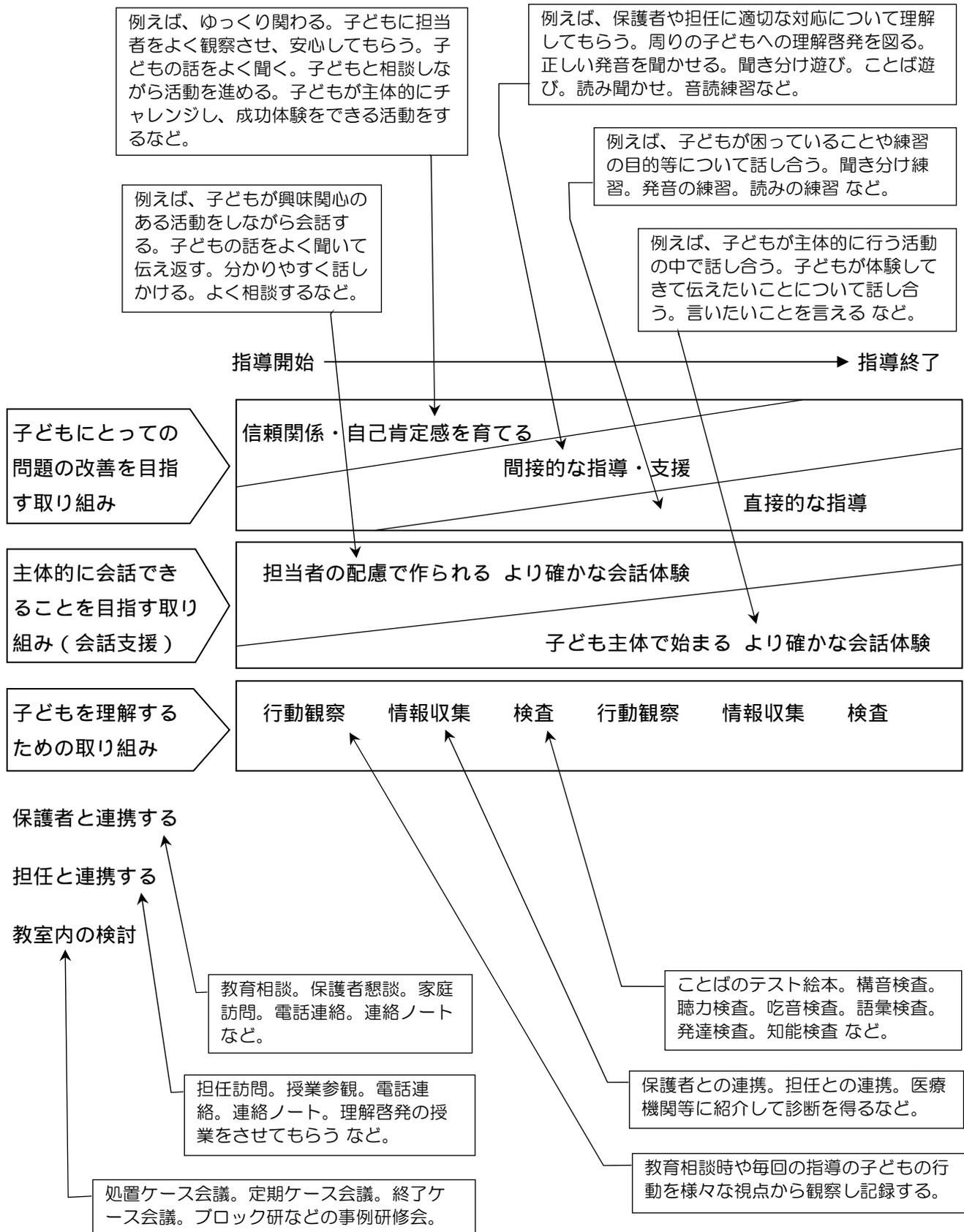
### 3 . 相談・指導・終了の流れ



#### ○指導の見直しと研修の場

- この流れの中では「指導の見直し」が大変重要になる。
- 指導の見直しを繰り返すことで軌道修正をし、より適切な指導に近づけていく。
- 特に、複数の担当で一緒に指導の見直しをする「ケース会議」が重要になる。
- ケース会議は同時に、担当者の貴重な「研修の場」にもなる。
- ケース会議の他、道言協のブロック研、大会の分科会、事例研などで行う「事例研修」が、私たちが最も大切にしてきた研修方法であり、私たちの専門性を磨く場となる。
- 事例研修では、事例を元に参加者が質問と意見を出し合い学び合う。質問からは、子どもをとらえる視点を、意見からは、考え方やアイデアを学ぶことができる。

## 4 . ことばの教室の教育活動

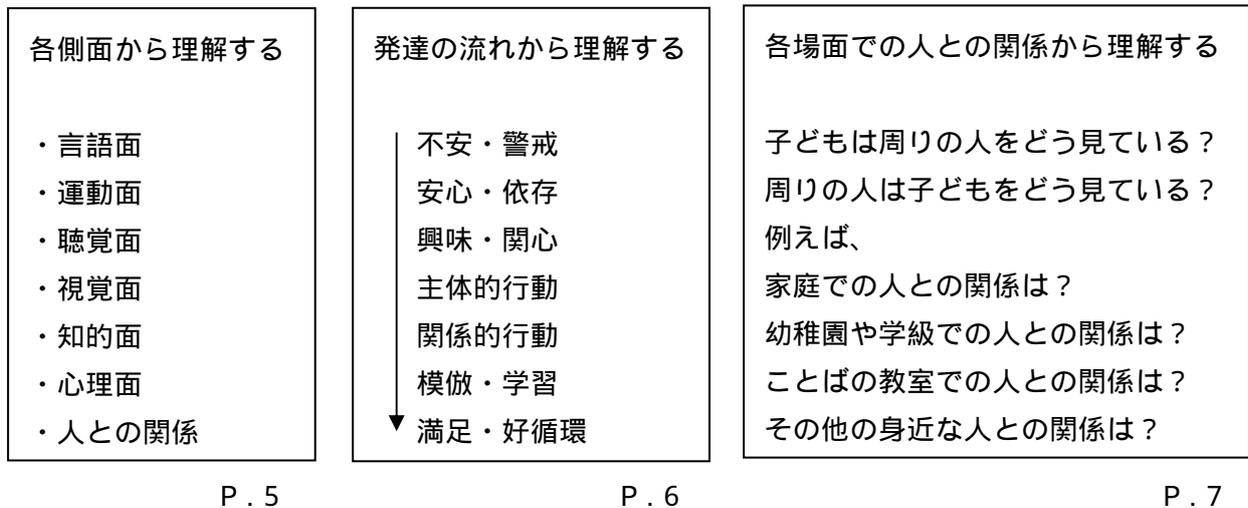


## 5 . 子どもを理解するための取り組み

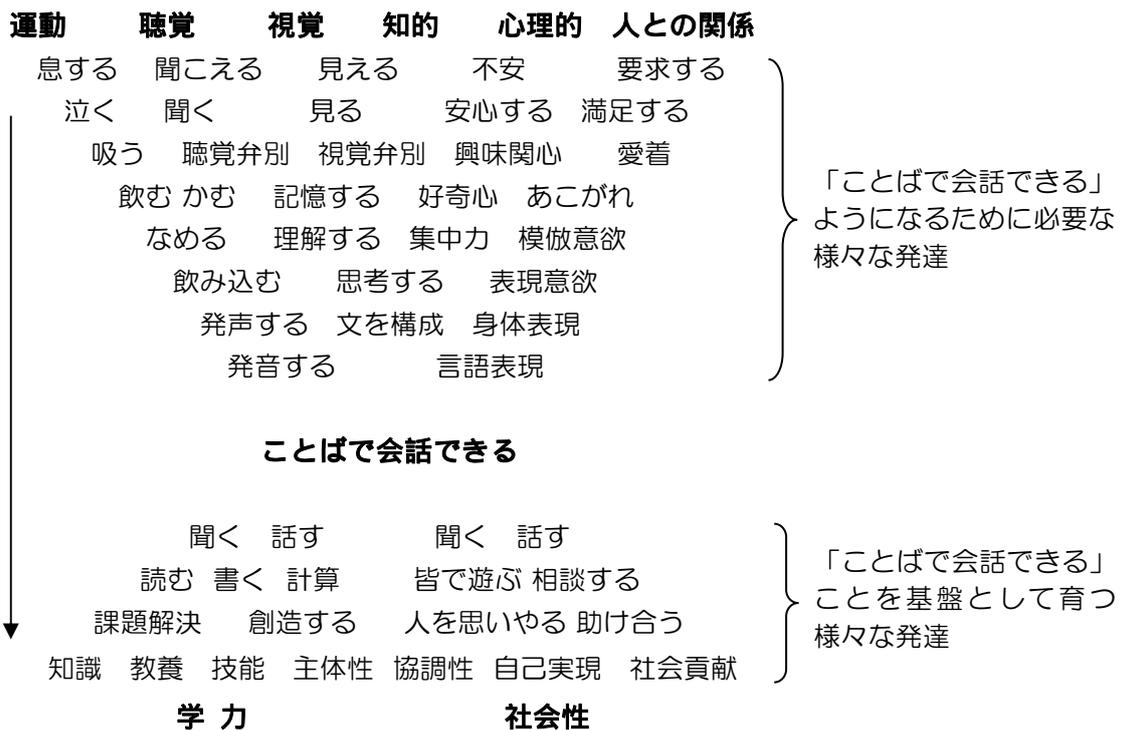
### (1) 発達上の様々な困難さが「ことばの心配」として気づかれる

- ・子どもは、様々な感覚や能力、心理が順調に発達した場合に「ことばで会話できる」ようになる。
- ・もし、子どもの発達はどこかに弱さがあったり育ちそびれがあったりすると、それが保護者によって「ことばの心配」として気づかれることが多い。
- ・そのため、様々な困難さのある子どもと保護者が「ことばの心配」で相談に訪れる。
- ・「ことばの心配」の裏側には、様々な発達の弱さや育ちそびれが隠れている。
- ・その子の発達の弱さや育ちそびれを理解していくことが、私たちの重要な仕事になる。

### (2) 子どもを理解していく視点



### (3) 子どもの各側面から理解する



#### (4) 発達の流れから理解する

子どもの発達は、多様であり複雑なので、理解することが難しい。そこで大雑把に整理をして、以下のような「発達の流れ」を考えてみた。一般的にこのような段階を踏んで発達していく場合が多いのではないかと考える。もしこの流れのどこかでつまずくと、その先へ進みにくくなる。

ここに提案する発達の流れは、便宜的に作った発達の流れであり、実際の子どもの発達は、多様で複雑で、これに当てはまらないこともある。ただ、このような発達の流れを頭に置いて情報を整理することによって、子どもの発達を理解しやすくなる。

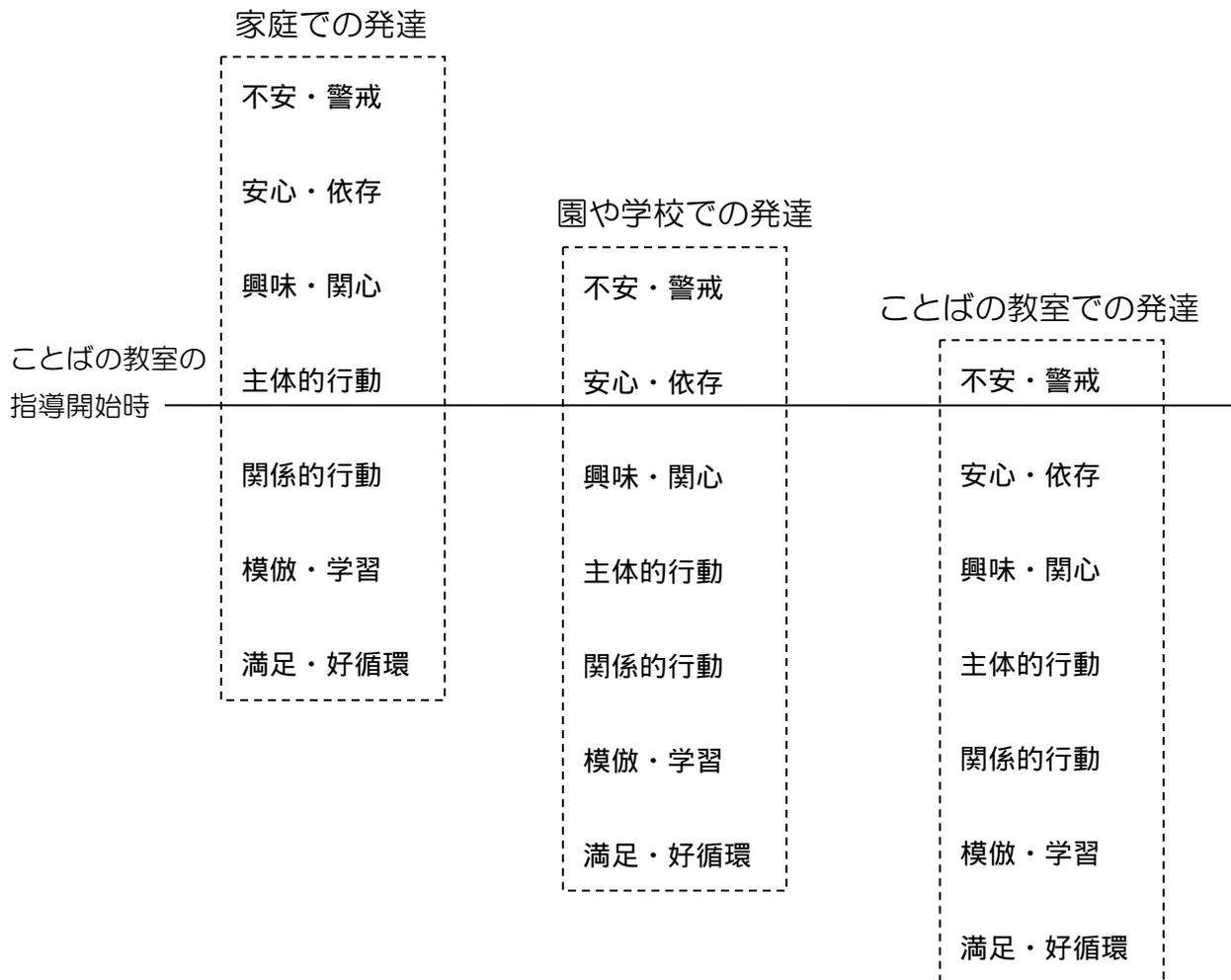
不安・警戒	<u>子どもの不安を大人が理解して関わると</u> 、子どもは安心する。
安心・依存	安心すると、周囲の物や人に対して興味関心をもつようになる。
興味・関心	興味関心をもつと、その物や人に対し主体的に関わろうとする。
主体的行動	<u>主体的な関わりを大人が理解して関わると</u> 、大人との良い関係になる。
関係的行動	大人との良い関係が発展すると、大人に憧れをもち模倣したくなる。
模倣・学習	模倣や学習が成功体験につながると、子どもは満足する。
満足・好循環	満足すると、さらに主体的に学習しようとする好循環になっていく。

例えば、0歳から3歳ぐらいまでの親子の間で、ことばが育っていく発達の流れは以下の通り。

不安・警戒	空腹や不快だと泣く。泣くとだっこする。あやす。授乳する。
↓	オシメをかえる。「欲求の充足」→ 快 満足する 「安心する」
安心・依存	以上が繰り返され、あやすと笑う。視線が合う。→「愛着の形成」
↓	養育する人に依存し、知らない人に「人見知り」をする。
興味・関心	周りの物や人への興味が広がる。つかむ。なめる。確かめる。
↓	物で遊ぶ。自分の手や唇で遊ぶ。「探索行動」
主体的行動	自分の声で遊ぶ。ハブー ンマンマ 「喃語」 人の注意をひく。
↓	したいことを人に「要求」する。嫌なことを「拒否」する。
関係的行動	イナイイナイバーなどで、人と遊び、楽しさを共有する。「関係行動」
↓	アッアと声と「指さし」で人を動かす。人とつながっている気分。
模倣・学習	人がしていることに憧れる。まねをする。「模倣意欲」
↓	声がことばの役割に変わる。ママ ババ「一語文」 通じ合えた気分。
満足・好循環	人と関わって遊ぶ。「つもり行動」「みたて遊び」「象徴機能」
	二つのことばをつなげて使う。パパ カイチャー「二語文」
	本人は話せる人になった気分。未熟な言語でも問題視されない
	な～に？ ど～して？ 子どもの質問に大人が答え、子どもが学習していく。

## (5) 各場面での発達の流れから理解する

このような「発達の流れ」は、子どもが家庭を離れ、幼稚園や学校、ことばの教室などの新しい場面で、新しい人々と出会う度に、あらためて「発達の流れ」の最初からスタートし、その場面の中で成長していくと考えられる。



子どもの発達の流れがどこかで足踏みをする、保護者は心配になり、ことばの教室等に相談に訪れ、指導が開始される。

ことばの教室等において相談や指導をするということは、「発達の流れ」に沿って、子どもを安心させ、興味関心を理解し、主体性を尊重しながら担当者との良い関係を培い、模倣や主体的な学習を促し、発達の好循環になっていくことを目指し導いていくことである。

それをうまく行うためには、子どもが家庭や幼稚園や学校等において、これまでにどのように成長してきたか、どこで足踏みしているかを、多面的・総合的に理解しておくことが役に立つ。

子どもを理解するために保護者から生育歴を聞いたり、家庭や幼稚園等でのエピソードを聞いたりしていくことは大変重要になる。それらを整理して保護者と共通理解をし、協力して子どもの成長を支援していく。問題の原因探しをするために、生育歴を聞くのではない。

## (6) 子どもを理解する手立てと指導計画

理解する手立てとしては、「行動観察」と「保護者面談」からケースの全体像を把握し、必要に応じて「検査」や「担任からの情報」「関係機関からの情報」を得てさらに詳しく理解する。その際、生育歴と現時点の様々な側面からの情報とをつなげて、総合的に理解することが重要で、それらを踏まえて指導計画を考えていく。

道言協は、発足以来「子どもを、多面的かつ総合的に理解して指導を考える」ことを大切にして研究活動に取り組んできた伝統がある。

## (7) 行動観察から子どもを理解する

- ・遊び場面、会話場面、検査場面などの場面で、子どもの様子（ことば、声、呼吸、表情、視線、姿勢、身体の動きなど）を注意深く観察し、言語症状や行動特徴、子どもの体の調子や心の動きなどを理解するように努める。
- ・子どもの「心の動き」が表れる微細な行動（サイン）を見逃さずに気づくことが重要。
- ・子どもと他者との関わりなど「人との関係」を見て理解することも重要。

## (8) 保護者からの情報収集と支援

- ・保護者の不安や心配、願いなどの思いをよく聞き共感的に理解する。
- ・家庭や学校における様々なエピソードを聞いて、子どもの生活を理解していく。
- ・生れてから現在までの様々なエピソードを聞いて、親子の歴史を理解していく。
- ・周りの人々との関わりの様子を聞いて、親子の周囲の状況を理解していく。
- ・病気や障がいの診断・治療の経緯、家庭環境の変化などを理解していく。
- ・それら理解したことを整理して、保護者に伝え返し、ともに考えていく。
- ・親子が歩んだ道のりを理解し共有することを通して信頼関係を醸成していく。
- ・保護者が必要とする情報を提供し、アドバイスや励ましをしていく。
- ・保護者の安心や自信回復が、子どもの安心や自信につながっていく。

## (9) 検査から子どもを理解する

必要に応じて、子どもの状態に即した検査を選択して行い、理解を深める。

- ・ことばのテスト絵本 ・構音検査 ・聴力検査 ・絵画語彙検査 ・吃音検査
- ・ことばの聞き取り検査 ・読書力検査 ・各種発達検査

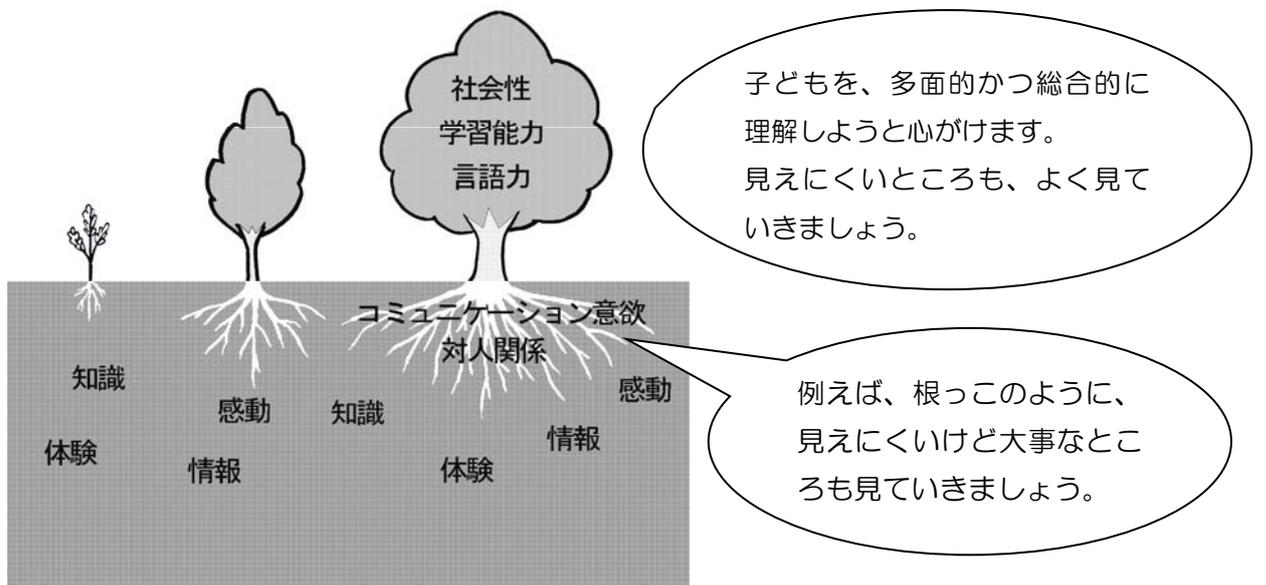
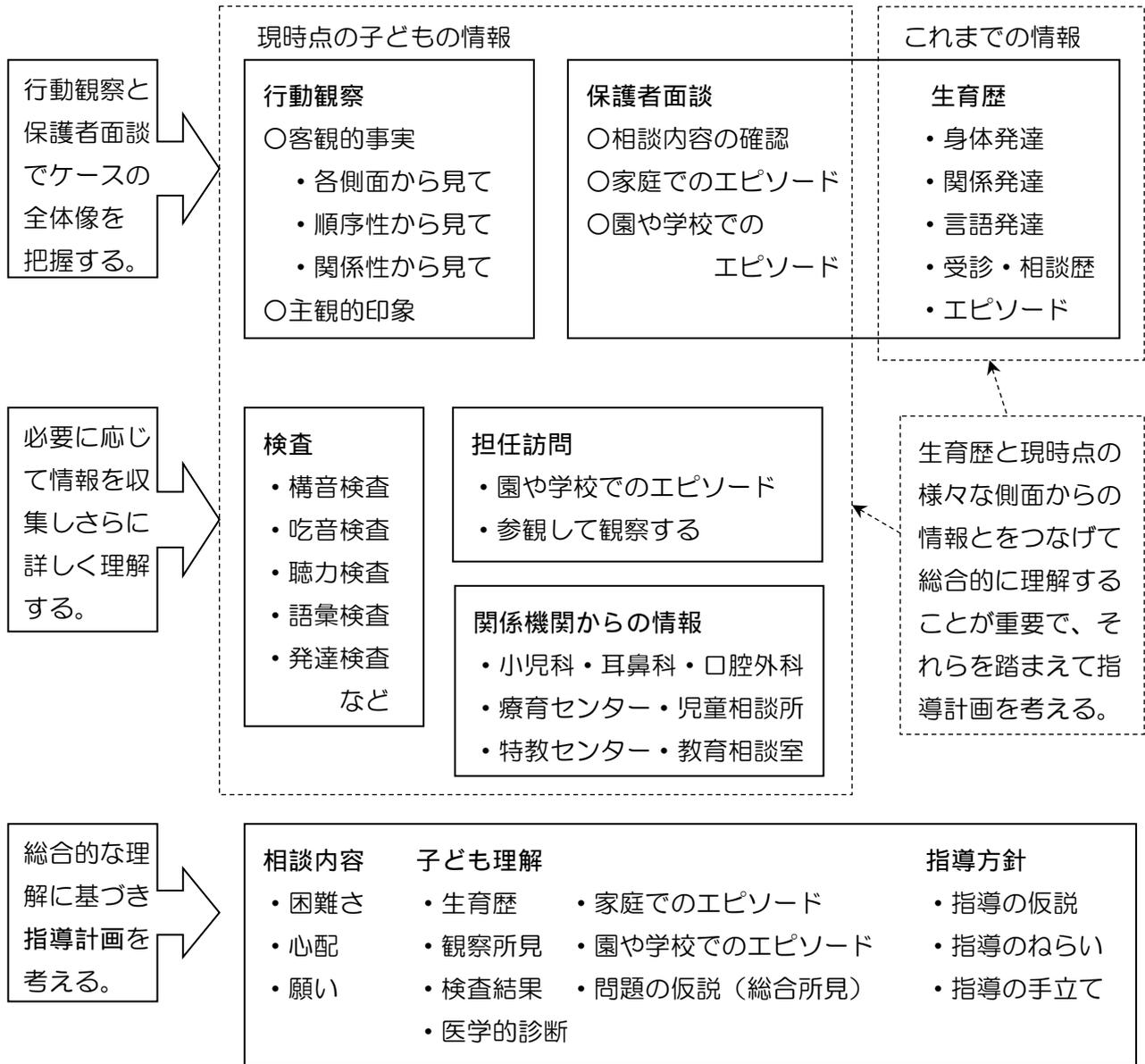
## (10) 担任からの情報収集と連携

- ・保護者の了解を得て園や学校における様々なエピソードを聞いて理解していく。
- ・園や学校における子どもの様子を参観させてもらい理解していく。
- ・お互いに情報交流するとともに、連携して指導を進めていく。

## (11) 関係機関の情報収集と連携

- ・必要に応じて、保護者の了解を得て医療機関や相談機関、特別支援学校などの関係機関に紹介し、診断や検査等を依頼し、専門的な情報を提供してもらう。
- ・必要に応じて、関係機関に指導を依頼する、あるいは連携して指導を進める。

# 子どもを理解し指導計画を考える手立てや手順



## 6 . 主体的に会話できることを目指す取り組み（会話支援）

### (1) 会話支援の考え方

- 子どもとの会話は、曖昧な会話になりやすいが、担当者がきめ細かく配慮をして、より確かな会話体験となるように導いていく。会話の仕方を教えるのではない。
  - どんな話し方でも、ちゃんと聞いてもらえると、
  - 言いたいことを分かってもらえると、
  - 分かりやすく話してもらえると、
- } 子どもは安心し、満足する。
- 満足すると、「もっと知りたい」「もっと分かってほしい」と内発的な動機によって、自発的な会話が増えていく。
  - 満足→動機→自発会話→満足→動機→自発会話 という好循環になっていく。
  - そのような体験を通して、人とおしゃべりすることを楽しく感じ、自発的におしゃべりをし、自分の言いたいことが言えることを目指していく。

### (2) 具体的な支援方法

- 子どもが教室に来てから帰るまで、全ての会話、一つ一つの会話を丁寧に扱う。
- たわいない会話であっても、一瞬一瞬を大切に会話する。
- 話を聞く時には、子どもの様子をよく見て、よく聞いて、言いたいことを読み取って、分かったことを子どもに伝え返していく。その時の反応を確認する。
- 伝え返すことで、子どもを安心させるとともに、話し方のモデルを示すことになる。
- 話しかける時には、声の大きさ、話す速さ、使うことば、言い回しなどを、子どもの反応を見ながら調整する。
- もし、理解できなかつたら、理解できるように工夫する。
- 子どもが理解できなかつた様子を見逃さないことが重要。
- 分かったつもりにならない。伝えたつもりにならない。確かめる。
- 会話の内容は、子どもの心に届くうれしい内容となることが大切。
- そのために、子どもの興味関心や心の有り様などを理解しようと努める。
- よく理解していると良い会話ができ、良い会話ができるとさらによく理解できる。

### (3) 会話することの効果

会話することは、人のあらゆる能力を総動員して行う総合活動であり様々な効果がある。

- 頭も心も身体も活性化させる働きがある。
- 人の思いや考え方に出会い、自分の思考を整理するのに役立つ。
- 弱った心や傷ついた心を回復させる働きがある。
- 人とのつながりを体感でき、子どもを孤立から救う働きがある。

### (4) 担当者の会話力を磨く

- 子どもにより良い会話支援をしていくためにも、保護者との信頼関係を築くためにも、関係者間の連携を図る上でも、担当者が会話力を磨くことが重要になる。
- 会話力があると、人と人との協力関係が強まり、様々な問題を解決しやすくなる。
- 会話力の中では「話す力」も重要だが、「聴く力」がより重要になる。

## 7. 子どもにとっての問題を改善する取り組み

### (1) 「子どもにとっての問題」を把握する

- 子どもの「言語症状」を客観的に把握するとともに、「保護者が困っていること」「担任が困っていること」「子どもが困っていること」をそれぞれ把握する。
- それらを総合して、改善すべき子どもにとっての問題は何かを考え「問題の仮説」を立てる。
- その「問題」を小さくしていくために、指導計画（仮説）を立て取り組んでいく。

### (2) 信頼関係と自己肯定感を育てる

- 子どもの中には、不安があったり、自己肯定感が弱かったりする人が多い。問題の改善に取り組む準備として、担当者との信頼関係と自己肯定感を強くしておくことが大事。
- ゆっくり時間をかけて関わり、子どもに担当者を観察させ、安心してもらう。
- 子ども自身の興味関心、知りたい、やってみたい気持ちを大切に作る。
- 子どもがやってみたいことに一緒に取り組み、支援する。
- やってみたいことに挑戦して実現できた体験が、自己肯定感を強くする。
- 担当者と協力して実現できた体験が、信頼関係を強くする。
- 自己肯定感と信頼関係が強くなることで、問題を改善するための準備ができていく。

### (3) 間接的な指導・支援

- 周りの大人がことばを注意しない、言い直しをさせない、どのような話し方でもよく話を聞く、正しい発音を聞かせる等、子どもにとって良い環境を作っていく。
- 周りの子どもたちへも理解啓発を図り、からかいなどが無い環境を作っていく。
- 子どもの実態に応じ、問題の改善につながる、注意集中、弁別力、記憶力、協応動作、呼吸、咀嚼、嚥下、発声、模倣、理解などの基礎的な力が伸びるような活動を取り入れていく。例えば、カルタ、双六、手まね歌、楽器、ことば遊び、読み聞かせ、音読など。

### (4) 直接的な指導

- 間接的な指導だけでは改善が期待できない場合や、本人が改善を希望する場合には、聞き分ける練習、発音の練習、読む練習などの直接的な指導の導入を検討する。
- 本人の困っていることや練習の目的や目標などについて本人と話し合う。
- 直接的な指導は、担当者と子どもが気持ちを合わせ、リラックスした状態で行うことが大切で、そのために信頼関係や情緒の安定、注意集中、模倣する力などが育っているかをよく見て慎重に行う。
- 子どもができるのはどの段階までか、どこから難しいのかをよく理解しながら指導を進めることが重要。うまくいかないときには、できるところに立ち戻ることが大切。
- 課題の設定では、「できること」が「できないこと」より多くなるように設定する。
- 子どもの様子をよく見て、試した指導方法が適切でない、あるいはまだ早いと判断したときは、指導を見直すなど柔軟に対応する。一つの指導法に固執しない。
- 言語症状の改善は、時間がかかる場合もあり、うまく改善しない場合もある。
- どのような場合も、子どもが主体的に会話できるようになることを大切に考えていく。

## 8 . まとめ

### 担当者の役割と子どもへの関わり

良い理解者になる。

子どもの不安や心配をよく理解する。  
興味や関心、やりたいことをよく理解する。

良い味方になる。

子どもがやりたいことに一緒に取り組み、  
分かり合い、つながっていく。

良い話し相手になる。

良い話し相手になって、会話を通して、  
より分かり合い、よりつながっていく。

良い支援者になる。

子どもが困っていることに一緒に取り組み、  
問題の改善を目指していく。

### 期待する子どもの変容

この先生なら大丈夫と思える。 安心

この先生とつながっていると思える。 関係

やってみたいことに挑戦したい。 動機

やってみたいことができた。嬉しい。 満足

分かった、分かってもらえた。嬉しい。 満足

もっと先生と話したい。 好循環

難しくても挑戦したい。 動機

「子どもの安心」を大切に。 }  
「子どもの動機」を大切に。 } この三つを外すと指導はうまくいかない！  
「子どもの満足」を大切に。 }

文責 元札幌市立中央小学校ことばときこえの教室教諭 池田 寛  
この資料に関するお問い合わせは以下のアドレスへお願いします。  
メールアドレス ikeda164link@gmail.com